



パンデミックと共に始まった国際医療協力キャリア

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 運営企画部 保健医療開発課

医師 坪井 基行

2020年1月、COVID-19に対して世界保健機関（WHO：World Health Organization）から国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC：Public Health Emergency of International Concern）が宣言をされたのと時を同じくして、国際医療協力局に入職した。それまで、国立国際医療研究センターにて世界三大感染症（HIV、マラリア、結核）を含めた多様な感染症診療に臨床医として従事している中で、グローバルヘルスに目が向くのは自然な流れで、ロンドンでの留学生生活を終えた後に、これまでの「感染症」や「研究」での経験を「国際協力」にも活かしたい、という思いで、国際医療協力局の門を叩いた。

入職前には、短期や長期の派遣を繰り返し複数の国々への派遣を経験しながら、現場での国際協力経験をつめるのではないかと期待していたが、実際には、パンデミックの影響で思い描いていた国際協力は全くできない状況、というのが現実であった。一方で、このような状況をあまり悲観的に考えることもなかった。世界全体で状況は皆同じで、あまり嘆いても仕方がない、ということもあるが、一つには、自身の専門が感染症であったことや研究スキルがあったことで、武漢チャーター便帰国者の検査、クルーズ船対応、軽症者療養施設開設・運営、高齢者療養型施設医療支援、空港・港検疫サーベイランス、東京オリンピック・パラリンピック対応など、様々なCOVID-19対応の現場へ派遣していただき自身の専門性を活かす機会があったためであり、もう一つは、日本にとっても大変な時であり日本にも貢献したい、という自国への帰属意識のようなものを

感じるようになったためである。

このような思いで、後ろ向きにはならず前向きに進んでいくことができた期間であったが、ようやく2021年12月に海外への派遣の機会が訪れた。パプアニューギニアでのWHO COVID-19対策チームの疫学コンサルタント業務である。パプアニューギニアでは、現地でのCOVID-19サーベイランスシステムの向上が主な業務であったが、実際に海外の現場に出てみて気がついた、国内での学びで役立ったことをいくつか記載したい。

一つ目は、現場の組織の役割・組織構造・各人の役割の理解に努めながら初対面の人たちと協働する、という状況に慣れたことである。前述した国内でのCOVID-19対応については、全て緊急時の対応になるため、組織構造もその都度異なっており、また、複数の組織が協力して実施されるものばかりである。全体像としてどのような役割を担う組織なのか、組織内の構造はどのようになっており、自身が所属しているチームはそのうちどこなのか、そしてそのチーム内での自身の役割はどうなのか、また他のチームはどのような役割を持っているのか、連携を考慮する際にはどのようなルートを取るのが適切か、等を考えながら初対面の人たちと同じ目標に向かって協働する、という経験を様々な現場で繰り返し得ることができていたことは、パプアニューギニアに派遣された際にも、WHOや保健省の対策チーム、その他多くの関係機関と関わっていく中で抵抗なく協働できたことに大きく役立ったと考えている。

二つ目は、アジアやアフリカの感染予防管理の専

門家らを招いての薬剤耐性・医療関連感染管理に関するオンライン研修の運営を研修リーダーとして2年間務めたことである。例えば、感染予防管理の訓練を実施するにしても、新しいサーベイランスシステムを構築・導入するにしても、

現場の担当者を訓練し人材を育成していくことは幅広い分野で必要となってくるが、実際に現場でも訓練のための研修がいくつも計画・実施されていることを垣間見ることができた。研修運営のために必要な計画・準備・連携・実施後の対応・オンラインでの研修体制構築など、リーダーとして全体を見渡しながらかん験してきたことが、どのように具体的に現場で活かされうるのかを知ることができたことは、大きな収穫であり今後も必ず役に立つと確信している。

三つ目は、検疫関連業務と日本全国の空港・港での検疫サーベイランスの経験である。感染症のコントロールにおいて、検疫は非常に重要な役割を果たしているが、実際にパプアニューギニアでサーベイランス強化を検討する際にも国境での検疫・サーベイランス体制について考える機会があった。日本の対応を知っていることで、日本ではこのような情報がサーベイランスに必要であったが、パプアニューギニアではどのような対応が現実的か等、パプアニューギニアと比較して考える際の尺度を持つことができた。また、日本と低中所得国での体制を比較しながら、検疫の役割とサーベイランスの実施可能性を実感できたことは、今後感染症のコントロールに引き続き従事していきたいと考えている自身とし

ても得難い経験であった。

最後に、公衆衛生的なあるいはグローバルな視点での議論にも触れる機会があったことである。パンデミック化でもオンラインで開催された世界保健総会等国際会議や、WHO主催の会議への参加、局内での議論や国際保健規則やコアキャパシティ等の健康危機管理における重要トピックの検討会などを通じて学んでいたことが、現場で周囲と自身が置かれている状況を理解する上で活かされることを実感できた。また、パプアニューギニア派遣時に、世界的な感染症コントロールに関わるGlobal Fundの資金援助を利用した計画にも少し関わったが、帰国後にGlobal Fundの理事会にも参加する機会があったことで、実施にどのようなシステムを用いて低中所得国の対策に貢献をしているか、現場とグローバルがどのようにつながっているかを体感することもできた。

また、COVID-19のパンデミックは終わった訳ではなく、新たにサル痘のPHEICも宣言されたばかりではあるものの、少しずつ海外渡航の門戸も開きつつある(2022年9月執筆時点)。国際医療協力のキャリアの開始とともにパンデミックに入ったことは良かったのか悪かったのか、また、今後どのような縁があり、どのような形でこの経験が活かされていくか、わからないことも多いのが正直なところではあるが、グローバルヘルス・健康危機というあまりにも広い分野に、今後も漠然とした関わりではなく、はっきりとした輪郭のある貢献ができるように努めていきたいと考えている。



パプアニューギニアでの活動風景



パプアニューギニアの空港での入国者検査実施の様子